香取遺産

Vol.43

「一ノ分目　善雄寺」

江戸幕府の砲術家 旗本田付家の墓

▲一ノ分目領主　田付景治の墓

JR成田線水郷駅の程近く、一ノ分目字小路に浄土宗善雄寺が在ります。

康元元年（1256）、登蓮社玉誉伝公上人の開山と伝わる由緒ある寺で、ご本尊は阿弥陀如来です。高さ1・76mの坐像で、いわゆる丈六仏です（昭和33年、県指定文化財）。

山号を野中山と称するように、かつては善雄寺の西方、字野中に在って、江戸時代に火災のため現在地へ移転した、と伝わります。

本堂裏手には、その際に移された古い墓石が並んだ一角があります。その一つに江戸時代一ノ分目の領主、旗本田付景治の墓石が建っています。高さは2・4mほどの比較的大きな墓石で、板碑型といわれる、頭頂部を山形に尖らせた形をしています。正面には「田付景治大居士」その両脇に「寛永十四丁丑歳（1637）三月十四日」と没年が刻まれています。

田付家は、はじめ香取郡において500石を知行された旗本で、一ノ分目村362石、米野井村138石の領主でした。後に、下野国などで300石を加増され、都合800石となっています。

景治の父は景澄といい、この人物は稲富一夢、安見右近とともに鉄砲三名人と呼ばれた、和流砲術の一つ田付流の始祖です。鉄砲、砲術に関する伝書も数多く著しています。

慶長18年（1613）から徳川家康に仕え、翌年の大坂冬の陣にも出陣しています。幕府編さんの史書『徳川実記』には、この時、景澄に打ち込ませた「大仏郎機」と呼ぶ大筒の砲弾が大坂城天守の柱に命中し、淀殿が大いに恐怖したことで、和議の機運が高まった、との逸話もあります。

真偽の程はともかく、その子孫は江戸幕府の鉄砲方を世襲し、また景澄の次男正景も大垣藩に仕え砲術を伝授するなど、同家は特殊な技能を受け継いだ家柄でした。

善雄寺には、田付家のうち、景澄と景治の2人だけが葬られたようですが、残念なことに景澄の墓石は今のところ見当たりません。

今後、その墓石や関係する古文書などが発見されれば、砲術家田付の存在がより一層身近なものとなるのではないでしょうか。